

第二目 海外留學制度

帝國海軍ニ於ケル海外留學ノ嚆矢ハ明治三年三月海軍兵學寮生徒前田十郎左衛門(鹿兒島)及伊月一郎(徳島)ヲ英國軍艦「オーデシアス」號ニ乗組マシメ三ケ年ヲ期シ航海術ヲ實習セシメタルニ始マル爾後幾多ノ俊○ヲ英佛等ノ本國へ派遣シ或ハ其ノ艦船ニ乗組マシメ専ラ海軍軍事ノ新智識吸收ニ力メシメタリ明治四年定メラレタル洋航規則ナルモノハ即チ當時ニ於ケル留學規定トモ稱スベキモノニシテ其ノ要綱次ノ如シ

一、各國御條約中ニ有之候條々ハ一々相心得可申候事

二、何事ニ依ラズ皇國ノ御爲ト可相成筋見聞之節ハ精々心ヲ用ヒ穿鑿テ遂ケ候上書面ニテ外國官又ハ神奈川、大阪、兵庫、長崎、新潟、函館ノ内外國掛御役所へ飛脚便ノ節可申越若又書面不便ノ節ハ歸國ノ上可申出事

三、銘々父母ノ邦ヲ離レ外國へ罷越候儀ニ付各覺悟可有之儀ニ候得共一身ノ憤方ハ不及申聊カノ事ナリトモ御國ノ外聞不相成様心掛ケ可申且引當無之外國人ヨリ借財ノ儀決シテ不相成萬一旅費其ノ外差支無餘儀外國ニ於テ借財致候ハバ歸國ノ節迄ニ何様ニモ致シ償戻シ決シテ不義理ノ事仕間敷若又引當等致シ其ノ儘逃ケ歸リ追テ相頼ハルルニ於テハ常人ハ勿論主家一類迄其ノ時証ニヨリ急度御答ノ上償戻ノ儀可被仰付事

四、他國ノ人別ニ加ハリ候事竝ニ宗門相改候儀堅ク御制禁ノ事

五、年限之儀ハ別段相定メ無之候トモ凡ソ十箇年ハ御許容可被下候事

六、年限相立無滞歸國ノ上ハ旅行中ノ始末委細ニ可申上候事

當時ノ海軍留學生ノ留學研究ノ目的ハ造船學ヲ主トシ蒸氣機械學醫術、製砲等之レニ次ギシガ元ヨリ水雷術ノ如キ願ミラルルニ至ラザリキ然ルニ明治六年川村海軍少輔ノ米國ニ巡歴スルヤ米國ニ於ケル水雷機密製造ノ事實ヲ耳ニシ歸朝後當時英國ニ留學中ナリシ海軍生徒平元秀次郎ヲシテ米國ニ轉航セシメ水雷製造傳習方ヲ申付ケシモ米國政府トノ交渉不調ニ終リ平元生徒ハ其ノ儘歸朝スルノ止ムナキコトトナリシモ要スルニ我海軍トシテノ水雷ノ傳習研究ニ着目セルハ之ヲ以テ嚆矢トス

本件ノ經緯ハ別紙參考其ノ一乃至其ノ四ニ見ルガ如シ

(參考) 其ノ一

合衆國へ水雷製造ノ場所有之當時秘密ニ製造候由ニ付先般拙者海軍局へ及直談候處表通及掛合候様ニトノ返答有之就テハ同國政府へ内々御掛合御頼方相成候様致度傳習人ハ右相談相運候得バ出歐者ノ内差出候様致度躰卿殿へモ及御話置候間早々御運方及御

頼談候也

明治七年一月二十四日

海軍省祕史局御中

川村純義

一九〇

(參考) 其ノ二 米國ニテ水雷製造方修業生徒ノ義ニ付伺

米國ニ於テ水雷製造所有之當時祕密ニ製造致シ居候處先般川村少輔俄國國歴遊ノ節右製造方修業生徒ノ儀同國海軍省へ及示談委細承諾ノ事ニ候得共一應表向掛合有之度旨ニ有之依テ今般當省ヨリ右海軍局へ及公談度、右修業生徒ノ儀ハ談合相調ト候上ニテ是迄英米兩國へ留學罷在候生徒ノ内人選入學爲致度人名等ハ追テ御届可仕候間前顯ノ儀早々御許可相成候様致度存候此段相伺候也

明治七年二月

太政大臣 三條 實美 殿

海軍卿 勝安房

(參考) 其ノ三

米國ニ於テ當時祕密ニ水雷製造致居候處先般川村海軍少輔同國經過ノ節右製造方傳習生徒ノ儀同國海軍局へ及頼談候處委細承諾有之就テハ衆テ英國へ留學致居候當省管理生徒平元秀次郎儀今般米國へ轉留右製造方傳習中付別紙ノ通本人へ相達シ度依テ此者儀右製造方傳習ノ手續等諸事可然取計有之度段竝ニ本人へ別紙達書申渡方等ノ儀米國在留公使へ御省ヨリ御達有之候様致度且又本人轉留ニ就テハ英國公使へモ報告可致儀等夫々可然御達有之度右等諸件乍御手数數御頼談申入候也

明治七年三月

外務卿 寺島宗則 殿

海軍卿 勝安房

英國留學

(別紙)

平元秀次郎

今般米國へ轉留、水雷製造方傳習申付候事

但シ傳習手續等委細在米公使ノ指揮ヲ可受事

(參考) 其ノ四

在米矢野次郎ヨリ別紙寫ノ通申越候處右御見込ノ程如何有之哉否來月二日迄ニ御申越有之度此段及御掛合候也

七年十月三十日

外務大少丞

海軍祕書官御中

(別紙)

本年九月二十四日附在米臨時代理ノ天野次郎ヨリノ公信書拔

先般水雷火製造傳習ノ爲海軍生徒平元秀次郎英國ヨリ轉學被仰付罷越候ニ付當國政府へ依頼致候處承諾難相成旨斷有之其ノ段御報知及置候次第ニハ候へ共其ノ後外ニ水雷火製造傳習取計方無之哉ト種々注意仕居候處此程伯國政府ニテ水雷火製造熟練ノ米人「ジョン、アルツクス」ト申者雇入へ談判有之候處雇入方條件中熟議相成兼候儀有之談判延引相成居候内今般日本政府ヨリモ雇入度趣御掛合有之候ニ付萬一雇入相成候儀ナラバ速ニ取定メ度段右「アルツクス」ヨリ申出談判延引致居候内日本政府へ雇

入談判取極相成候儀ハ致方無之旨伯國政府ヨリ挨拶相成居候趣當國在留伯國書記官ヨリ委細承リ込候ニ付萬一右「ブルークス」等御雇入相成儀ニ候ハバ急速其ノ段御達シモ可有之儀ニテ前文「ブルークス」ヨリ「ブラジル」政府へ申立候儀ハ全ク虚〇ト存候得共爲念承及候儘御報知致候間海軍省へ可然前段御通達被下度候

(參考)

右ニ依リ平元ハ其ノ儘歸朝ヲ命セラル又「ブルークス」云々ニ就テハ全然虚構ナリ海軍省ヨリ申出テタル事實無シ

明治十一年五月英國留學生徒八田裕二郎ニ對シ英國綠林海軍大學校ニ於テ卒業後一ケ年間水雷術修業ヲ申付ケラレ蓋シ八田生徒ノ志願ニ因ルモノニシテ明治十二年八月水雷術修業ヲ終へ歸朝ノ途次更ニ米國ニ於テ水雷術ニ關スル取調べヲ爲シ十四年二月歸朝セリ八田生徒ノ志願書及修業交渉公文書次ノ如シ

(留學志願書)

拜啓去ル明治六年ノ秋當國海軍ニ從事セシヨリ水雷火術ノ海軍ニ緊要ナルヲ知り候へ共未ダ其ノ術ヲ修ムルニ遠アラズ候處幸ニ野生儀昨春運用料ノ試験ヲ經同夏歸英現ニ綠林海軍學校ニ入學罷在候尤モ最後ノ檢査ハ當六月中ニ過スベキ筈ニ御座候扱テ其ノ後ハ一ケ年許リ専ラ右水雷術修業ニ打掛リ度志ニ御座候勿論當國ニ於テモ祕密事件ニ御座候へバ必ズ其ノ奥義ヲ探索スルノ成否ハ難圖候得共何分努力ヲ盡クシ研究仕リ宿志ノ萬一ヲ遂ゲ他日此學科ヲ以テ我海軍ノ一助トナランコトヲ冀フトコロニ御座候何分

ノ御命令仰度奉應願候

明治十一年三月二十三日

八 田 裕 二 郎 拜

海軍大輔 川村純義閣下

(留學交渉文)

英國留學當省生徒八田裕二郎儀去ル六月綠林海軍校ニ於テ最後ノ檢査可相濟ニ付其ノ後一ケ年間水雷術專修致度旨願出候條聞届別紙辭令書御同シ申候間本人へ御達示相成度隨テ學費等送金ノ都合モ有之候ニ付綠林海軍校檢査濟ノ月日早速届出候様御達置有之度此段及御依頼候也

明治十一年五月二十日

川 村 海 軍 大 輔

上 野 全 權 公 使 殿

(別 紙)

英國留學生徒 八 田 裕 二 郎

英國ノ綠林海軍校ニ於テ卒業後一ケ年間水雷術修業申付候事

明治十一年五月二十日

海 軍 省

明治十二年六月十七日有田源三郎(四年前露國海軍機關士「ダイテル」ノ私費ニテ西比利亞ヨリ露都ニ到リ「コロンスタット」水雷製造所ニ於テ修業ノ者)ヲ海軍生徒ニ命ジ水雷製造修業トシテ露國留學ヲ命ゼリ

(註) 前記八田裕二郎及有田源三郎ハ歸朝後水雷術方面ニ補職セラルルコト少ク斯術ニ關シ特記

スベキ効績無カリキ

次デ明治十六年初頃在英海軍中尉伊集院五郎ハ命ニ依リ綠威海軍大學校ニテ水雷術ヲ學習シ同年六月卒業ニ付二等免狀ヲ授與セラル（同中尉ハ爾後英國ニテ建造ノ軍艦浪速水雷長トシテ其ノ艦裝ニ從事ス）

爾後明治三十二年六月海軍中佐小田喜代藏ヲ英國駐在ト爲シ沿岸防禦ニ關スル諸般ノ事項ノ調査研究ヲ爲サシムル迄絶ヘテ水雷術ニ關スル海外留學ノ研究ノ舉ヲ見ズ又小田中佐以後ニ於テモ「水雷ニ關スル事項ノ調査研究」或ハ「海軍一般軍事特ニ水雷術ニ關スル事項ノ調査研究」等ノ各目ノ下ニ駐在セシムルモノアリシニ止リ特ニ留學或ハ關係學校入校等ノ行ハレザリキ

明治三十九年八月十日坂本海軍教育本部長ハ加藤海軍次官ニ照會スルニ歐米各國駐在官ヲシテ時機ノ得ル毎ニ左記諸項ヲ調査報告セシメラレムコトヲ以テセリ蓋シ當時ニ於ケル或海軍ノ外國海軍ニ對スル期待ノ一端ヲ窺知スルニ足ルモノアリ參考トシテ其ノ摘要（水雷術ニ關係アルモノ）ヲ掲記ス尙本調査事項ハ爾後長期ニ亘リ留學又ハ駐在者ノ研究調査ノ目標タリシモノナリ

調 査 事 項 （摘 録）

- 一、將校ニ對シ砲術水雷術若クハ戰術ニ關スル高等教育ヲ施スベキ特設教育機關アルベシ其ノ組織制度如何
- 二、前項砲術、水雷術若クハ戰術ニ關シ各個獨立ノ教育機關アリトセバ其ノ相互ノ關係及入學順序等如何
- 三、砲術及水雷術練習ノ新組織アラバ其ノ條例特ニ射手教程ニ關スル事項
- 四、砲術及水雷術練習ノ教程ニ要スル發射彈藥水雷等其ノ類別

五、各練習所所屬艦艇ノ種類及其ノ用途組織

六、各練習所毎年收容人員各學期共

七、驅逐隊、水雷艇隊ノ教育訓練法

八、驅逐艦水雷艇ノ訓練ニ要スル彈藥水雷(實用頭部ト衝突頭部トニ分ツ)ノ消耗規定

九、水雷攻撃部ト敷設部ノ關係及其ノ教育法

十、特科兵ニ對スル加俸及一般進級ニ及ボス關係

留學生及駐在員制度ニ關聯シ前掲明治四年洋航規則ノ制度後新ニ制定セラレタル關係法規中主要ナルモノヲ示セバ左ノ如シ 但シ其ノ本文細項ニ就テハ之ヲ省ク

制定年月日	法	規	摘	要
明治 七年六月	海軍兵學	海外留學生規則		
同 七年七月	海外留學歸朝者	試驗法		
同 二十年五月	海軍海外留學生	給與概則		
同 二十二年二月	外國留學生	取締規則		

同三十三年六月	留學生監督服務規則
同三十四年三月	海軍駐在員規則及駐在員監督服務規則
同四十一年四月	外國留學生規則

之等諸法規ハ其ノ後數次ノ改廢加除ヲ見タルモ特ニ水走術ニ關與スルモノ少キガ故ニ掲記セズ